

# 充実した〈言語活動〉のあり方を求めて

三 藤 恭 弘

## 1 問題の所在と研究の目的

「学校現場における教員の悩みの一番は言語活動について」だという最近の調査がある。「言語活動」自体はそう目新しい言葉・概念ではない。だが、現在求められている「言語活動の充実した授業」を、ということになると、これをどうとらえたらよいのかわからなくなるという教員は多い。また、言語活動についてよく取り上げられる問題として「活動主義的な言語活動」、「力の育っていない言語活動」というものが指摘される。

これら2つの課題状況について、本考察では言語活動がなぜ必要なのか、導入の経緯や原理・原則の面から検討し、問題の状況を生み出していると思われる点を掘り下げ、言語活動導入本来の目標を達成する言語活動のあり方について考察したいと考える。

## 2 「言語活動の充実」に至る経緯

「言語活動の充実」がいかなる経緯で学習指導要領の柱のひとつとして取り上げられたのか、学習指導要領解説〈国語編〉の総説を読めば、あらためてその流れを確認できる。

総説では、21世紀を「知識基盤社会」と位置づけ、そこから求められる力を「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和、すなわち「生きる力」と述べている。一方、OECDの学力調査から課題として浮かび上がった内容を次の3点に集約している。①「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題の課題」②「家庭での学習時間など学習意欲、学習習慣・生活習慣の課題」③「自分への自信の欠如や将来への不安、体力の低下の課題」である。

これを受け、2005年文科大臣が中央教育審議会に諮問、2008年、新しい学習指導要領改善の指針が答申される。答申に述べられた「学習指導要領改訂の基本的な考え方」7点のうち、③

基礎的・基本的な知識・技能の習得と、④思考力・判断力・表現力等の育成、に関わり、「言語活動の充実」が提言される。答申の「7 教育内容に関する主な改善事項」では、「理数教育の充実」や「伝統や文化に関する教育の充実」に先だって、一番最初に「言語活動の充実」が謳われている。

このような中で、平成二十年版学習指導要領では「言語活動の充実」について総則の第4にその趣旨が述べられた。ここに「思考力・判断力、表現力等をはぐくむ」というねらいに対して、「基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視する」とともに、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実する」という方針が学習指導要領に明記されたのである。

### 3 「言語活動の充実」導入の目的

「言語活動の充実」導入の経緯を踏まえ、「言語活動の充実」導入についていくつか整理してみる。

1. 「言語活動の充実」は「思考力・判断力・表現力」の育成を最終的な目標として導入された。
2. 「思考力・判断力・表現力」を育成するため、「言語」に対する関心や理解を深め、「言語」の能力の育成を図ることが求められる。
3. 「言語」の能力の育成を図るため、「言語環境を整え」「言語

活動を充実」させることが求められる。

これらについてまず課題として浮かび上がることは、これらは現場の教員を困惑させる二重性をはらんでいるということである。つまり「言語活動」は思考力・判断力・表現力育成の手段であると同時に、その活動を遂行する能力（つまり言語の能力）の育成自体も目的であるということである。このため、授業の目的が「言語活動」そのものであるような誤解を受けたり、目的を正しく理解していても結果としてそのような状況に陥っている場合がある。（課題①）

また、「言語活動」導入の目的は上記のように整理できるが、前提として忘れてはならないことは、各教科等の教科目標の達成である。「言語活動」によって「思考力・判断力・表現力」が育成されなければならないが、それは同時に各教科等個別の目標を達成するものでなければならぬ。この二重性（言語の能力の育成もあわせれば三重性とも言える）も現場にとってわかりにくい点となっている。（課題②）

この点について整理する。

言語活動によってめざすもの

1. 思考力・判断力・表現力の育成
2. 言語の能力（≡言語活動を遂行する力）の育成
3. 各教科独自の目標の達成

では、今度は「言語活動」を「授業」／「学習」という観点から

整理してみる。

「言語活動」は指導者の側からとらえると、上記の目標を達成するための手段・方略として授業に導入されたものである。だが、学習者の側からすれば、これは「学習（あるいは活動）」の「目標」ともなっている。学習者は、「言語活動（学習）」の目標を達成しようとするうち、指導者の設定した「指導目標」である「能力」や「知識」を身につけていく、という構図・原理により授業は展開される。この「児童にとつての目標（≒活動目標）」と「指導者にとつての目標（指導目標）」の二重性、という点も課題①と関連して現場教員の理解が十分深まっていな点に思える。（課題③）

#### 4 「言語／言語の能力」について

「言語活動」が「言語活動遂行の力＝言語の能力」の育成、という目的も有していることは前節で整理した。ここでは「言語活動遂行の力＝言語の能力」あるいは「言語（またはことば）」の特質その育成法について考えてみたい。

「ことばとは私たちひとりひとりの内側…抽象的には『心(mind)』実的には『脳』と呼ばれている仕組みに内在する母語の知識を意味する。」（大津由起雄 2012）

「ことばはもともと社会的な伝達的手段として獲得される。それが自己中心語の多く見られる5、6歳の頃に枝分かれして、一方は伝達的手段として洗練されていく。他方は思考の手段として個人的な言語活動へと発展し、いずれ内面化されてい

くのである。彼（\*ヴィゴツキー）はことばの働き方の違いによって、伝達的手段としての言語を「外言」、思考の手段としての言語を「内言」と呼んで区別した。」（内田伸子 196\*）は引用者）

「ここには「言語（ことば）」が「母語の知識体系」であることや、「伝達」や「思考」の手段としてのシステム・道具であることが述べられている。また、「言語」の本質観として中教審答申ではこれらに加え、「感性・情緒の基盤」というとらえが示されている。

「国語はコミュニケーションや感性・情緒の基盤である。自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係においていわゆる容易にキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である。」

「それぞれの教科等で具体的にどのような言語活動に取り組むかは8. で示しているが、国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけではなく、5.（7）の第一で示したとおり、コミュニケーションや感性、情緒の基盤でもある。」  
このように言語の本質観として「内言」「外言」に加え、「感性情緒の基盤」という特質を中教審答申はあげている。

では、このような特質を持つ「言語」の力を育成するにはどのような内容を重視したら良いのであろうか。荻野美佐子は述べている。

「学齢期以降に達成される読み書きの獲得は、単に文字を覚

えるといったことではなく、言語を意識化する能力（メタ言語能力）の発達を土台とするものである。幼児期の後半ごろから、子どもは自分自身のしている言語活動を意識するようになり、これがより精緻な言語の獲得や、言語についてのより深い理解につながっていく<sup>3)</sup>」

また、中教審答申にも、

「自らの言語活動を振り返ることができる能力などの育成を図る」

「言語の多様な動きについての理解を重視する」とある。

指導者は「言語活動」を通して学習者に能力・知識を獲得させようとし、学習者は「言語活動」の目標を達成しようとして指導者の意図する能力・知識を獲得していく。だが、そこに「言語への自覚」「メタ言語」という指導・学習の視点が落ちてはいないだろうか。（課題④）

## 5 「言語」活動の構造化

前節においては「言語」を「内言・外言・感性情緒の基盤である母語の知識（社会的な記号システム）」と整理してみた。では、そのような特質をもつとされる「言語」の活動について学習指導要領（小学校国語）ではどのようなものが例示されているか、改めて振り返ってみたい。

〈話す・聞く・話しあう〉

説明、報告、感想、尋ねる、応答、まとめる、あいさつ、連絡、紹介、聞く、意見、話し合い、話す、助言、提案、討論、推薦

〈書く〉

文章化、記録、メモ、手紙、作詩（詩・俳句・短歌）、物語の創作、随筆叙述、新聞作成、資料活用、依頼文・案内文・礼状作成、編集

〈読む〉

読む、聞く、演じる、感想、紹介、図鑑・辞典の利用、読み合う、説明、関連読書、生き方を考える、意見文・解説文の利用、新聞を読む、推薦

以上が学習指導要領（小学校国語）に例示された言語活動を短くまとめたものである。これらを上記3つの目標達成のため、授業に導入していくため、これらの「言語活動」を活動スケール（規模）の面から整理してみたい。例えば、これらの活動はおおよそ次のようなレベルに分けることが可能である。

- A 単元レベルの言語活動（単元を貫く言語活動と言われるようなもの）
- B 単元内におけるまとまり（一次、二次等）、あるいは一単位時間レベルの言語活動
- C 一単位時間内におけるブロックレベルの言語活動（音読をする、書き出しを行う等）

実際に例示された言語活動をA、B、Cに分けてみる（重複有り）。

#### 〈Aレベル〉

討論、推薦、作詩（詩・俳句・短歌）、物語の創作、随筆叙、新聞作成、編集、読む、読み合う

#### 〈Bレベル〉

報告、感想、まとめる、あいさつ、紹介、話し合い、提案、討論、推薦、手紙、作詩（詩・俳句・短歌）、新聞作成、資料活用、依頼文・案内文・礼状作成、編集、読む、演じる、感想、読み合う、関連読書、生き方を考える、意見文

#### 〈Cレベル〉

説明、報告、感想、尋ねる、応答、まとめる、連絡、聞く、意見、話し合い、話す、助言、文章化、記録、メモ、手紙、資料活用、読む、聞く、演じる、図鑑・辞典の利用、読み合う、意見文・解説文の利用

このように一口に「言語活動」と言っても大小様々あり、それらは言語活動の基礎的なものから、活用的・総合的なものまで様々である。これらを現場の教員がしっかりと意識して、「目的・目標」に対し、構造的・有機的に組織化できているかどうか、という点は課題である（課題⑤）。例えば「言語活動とは読解のあとに行う表現活動の部分」というとらえや、「何か特別なものを準備したり、おこなったりしなければならない活動」というような漠然と

した観念を抱いたりする。これでは「言語活動」が「活動主義的」に陥ってしまうのも無理ないのではないだろうか。

## 6 「言語活動」の「充実」のために

ここまで考察を進め、今回明らかになった課題が5点あった。

- ① 「言語活動遂行の力」ではなく「言語活動」そのものが指導者の目標になっていないか。
- ② 「言語活動」を通して、「思考力・判断力・表現力」「言語の能力」「教科個別の目標」の三兎を追う、という認識が指導者にあるか。
- ③ 指導者自身が「指導者の目標」と「学習者の目標」は違うということを十分理解できているか。
- ④ 指導者に「言語への自覚」「メタ言語」という指導の観点があるか。
- ⑤ 指導者が「言語活動」を構造的にとらえ、目標に対して「意識的」・「有機的」にそれらを組織できているか。

これらの課題・問題に対し、現場で「言語活動の充実」導入の本来的目的を達成するような授業を展開していくにはどうしたらよいのだろうか。

この点を読み解くキーワードがまさに「充実」である。なぜな

ら、これらの課題は、「言語活動」が「充実」している状態、というものを具体的に認識できていないところから巻き起こっていると考えられるからである。

中教審答申は「言語活動」の導入を求めたのではない。「言語活動の充実」を求めているのである。

では、「言語活動」が「充実」しているとはどういうことであろうか。「言語活動」導入の経緯から丁寧に見てきたとおり、導入の目的に照らし合わせて考えるなら次のように言い表すことができるであろう。

1. 「思考・判断・表現」の場面があり、それらの能力が働き、その能力が育成されている状態。
2. 「言語」のあり方を考える場面があり、「言語」の能力が働き、その能力が育成されている状態。
3. 教科目標の達成がめざされ、その能力や知識が獲得されている状態。

これら「言語活動の充実」した状態が、指導者によって実現されることが求められる。では、これら「充実」した「言語活動」を行うにはどのようなことを重視する必要があるのだろうか。そこには指導者が留意すべきポイントがある筈であり、それを指摘することが本論考の目的でもある。

#### (1) 「言語活動の充実」導入の目的の再認識

まずは、上で述べたように「言語活動」が「充実」した状態というものを、導入の目的に照らし合わせ十分理解する必要がある。何のために「言語活動を充実」させようということなのか、指導者各人がよく理解し、その状態を具体的な授業場面としてイメージする。このことだけでも、課題の①、②、③の解決は随分図られるのである。

#### (2) 授業設計

次に、授業を構想するにあたって、「言語活動」をどう位置づけるかという問題がある。「言語活動」を構造的にとらえ、有機的に位置づけた「授業設計」が重要である。「言語活動の充実」の目的を念頭に置きながら、単元の「目標」、「教材」の特性に鑑み、先ほどのスケール（規模）の上からみた言語活動を、それぞれの「特質」を生かすかたちでどう構造化していくかという点が重要である。

まず、単元の目標がある。どのような力（教科固有の目標、思考力・判断力・表現力、言語の能力）を身につけさせるのかを明らかにする。そして、その目標に対して「A 単元レベルの言語活動（単元を貫く言語活動）」を設定する。この時、「言語活動」にはそれぞれ「特性」があるということを十分考える必要がある。目標に対して、その目標を達成するポテンシャルのある言語活動を選ばなければならない。次に、「A 単元レベルの言語活動（単元を貫く言語活動）」が設定されたら、それを生かすための「B 単元内に

おけるまとまり（一次、二次等）、あるいは一単位時間レベルの言語活動」を組織する。Aレベルの言語活動が生きたる、あるいはそれを生かすBレベルの「言語活動」計画をたてる必要がある。Bレベルの言語活動が決まれば、「C 一単位時間内におけるブロックレベルの言語活動（音読をする、書き出しを行う等）」を位置づけていく必要がある。そして、やはり同様にBレベルの言語活動を生かすには、どのようなCレベルの言語活動が必要か、その言語活動の「特性」を考えて組織化する。これらの大小様々な言語活動が「目的・目標」に向かつて、互いに生かし、生かされる関係で構造化される状態が「有機的に」という状態である。

### （3） 自覚

これまで見てきたように、中教審答申や学習指導要領は「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る」ということを求めている。そしてそのために「必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実する」ことを求めているのである。ということとは、当然そのような「言語活動」が設計、展開されなければならない。つまり普段無自覚に使っている「言語」がどのようなものであるのかあらためて自覚することが重要になってくる。では、例えば、物語教材を扱う単元では、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る」にはどのような学習の展開が考えられるであろうか。

#### ① 言語内容／言語構造に対するメタ言語的視点

例えば「物語を読む」という学習があり、次に「物語を書く」という学習があった場合、そこにはそれぞれの学習の共通項として「物語」という「文章（文種）」が存在する。この「物語を読む」という国語の学習は内容を読み味わい、考えるだけでなく、物語の仕掛けや構造に迫り、そのような構造を組み立てた作者の意図というものに迫ろうとする。それはまさに「感動の源拠を探る」（吉田裕久<sup>41</sup>）学習である。これがメタ言語的学習であり、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る」学習であろう。

例えば次の実践例は「物語を読む」という単元と「物語を書く」という単元を交互に（スパイラルに）配置して取り組んだ時に現れた児童の感想である。平成22年度から23年度にかけ学習者は5年生／6年生の2年間、物語については、「物語の読解」↓「物語の創作」↓「物語の読解」という形で基本的には単元と単元を配列した。その2年目の秋、「やまなし」の初読の感想である。

「宮沢賢治さんの文の書き方も工夫があると思います。例えば、会話のところはほぼ会話文が多いまとまりで、現在進行形の（語りの部分の）ところはそのままひらがひらになっていきます。そして、私達子どもにもわかりやすい比喩表現が豊富です。読者を物語にひきこませるような文が多いので、こっちは読んでいて楽しくなります。それに、少し怖いところ（例えばカワセミのやってくるシーンなど）をとりいれてるので、少しドキドキして面白いです。まるでカニたちが人間のように普通に話しているのも、宮沢賢治さ

んの想像力が豊富だからだとも思います。このように、宮沢賢治さんの『やまなし』にはとても色々な読者を楽しませるヒミツがあります。私も今度物語を書く機会があればこの事を取り入れて書きたいと思います。」(Nさん)

「僕は書き方、表現の仕方などに注目しました。例をあげると、色のことについての表現がありました。青とか白とか色々でました。僕はこれを見てすごいと思いました。なぜなら色のことをいかにするために、鋼など海(\*初読で谷底を海だと思い込んで読んで)。に絶体にない物をおいているのです。さらに色を強くするために二色同時に使うことも多々ありました。色をここまで表現するといんパクトも強く、より幻想的に表現することができるので、とても勉強になりました。次回から皆で視点なども考えながら追求していけたら、見方が変わるのではないかと思いました。」(Mくん)

「黄金を金と読ませるのも味があるなと思いました。最後にこれでおしまいでありますって書いてあるのも、おもしろいなと思いました。まとめですが、意味は分かりにくかったけど、勉強していくとおもしろそうでした。」(T Mくん)

「五月にはよく出てきた『クラムボン』は正体がわからず、しかも作者が作ったと書いてある。読者にクラムボンは何かを考えさせるつもりなのだと思います。」(TSくん)

これらの児童は初読の感想にもかかわらず、既に次の「創作」のことを念頭におき、読者・作者双方の立場から、それぞれ作者・読者を意識し、物語を構造的に読んでいくのがよくわかる。また、「物語という文種・言語のあり方」についてのメタ言語的な感想を

持っている。物語の主旨に向かう内容的な読み深めももちろん価値ある学習であるが、その物語を作者はどのように構築しているのか、というような言語の構造に児童の興味を喚起されていることを見れば、「言語の能力の育成」という点から考え、この学習方略の有用性が理解できるであろう。

## ② 言語活動／自らの言語能力・知識への省察(ふりかえり)

学習の省察(学びの自覚化)は、学習内容の定着を深めるだけでなく、自分の学習を管理する能力を育てる。内容は読み取れたのか、自分は一時間の間に変容したのか、それはなぜ達成できたのか、できなかったのか、そのような省察能力そのものを身につけさせることは、目標とする能力、知識の獲得と同等に重要な能力である。目標とする能力には言語能力も入る。それ故、自分自身の言語能力・言語知識への省察も必要である。自分はどのような言語能力が獲得できていないのか、どのような言語能力を獲得したいのか、というような意識が、学習者をして積極的(能動的)な言語学習者に育てていくと考える。次のものは上記で取り上げた短歌の授業の最後の場面で書かせた「ふりかえり」のものである。

「どの作品もみんなふだんあまり気にしない小さなことで、でもその中に一人一人の思いがまつていて、『うん、うん』とうなずいて共感しました。ポストの例だったら、本当は手紙(おくられてくるもの)に目がいくのに、この作品を書いた人はその物とどける人(バイクの音)に注目しているところがすごく気に入りました。私が短歌を書くときはささいなことでもみんなに共感してもらえ



## 7 まとめ

今回「言語活動の充実」に関わる課題としての「活動主義的な言語活動」「本来の目的を達成できていない言語活動」を改善するために、言語活動導入の経緯や、原理原則的な面からこれらの状況や「言語活動」そのものに対して分析、考察を行ってきた。その中で新たな課題が5点明らかになった。そして、それらを乗り越えるため、「言語活動」を「充実」させるという観点から、その内容を具体的に検討していった。

以上を踏まえ、本論考「言語活動の充実」のあり方として次の何点かが整理できるであろう。

1. 「言語活動」導入の目的を再度よく認識する必要がある。その目的は「思考力・判断力・表現力の育成」「言語活動の推進能力＝言語の力、の育成」「教科固有の目標の達成」である。
2. 1. の「目標」達成のため、具体的な単元の「目標」を設定し、「言語活動」を構造的・有機的に位置づけた「授業設計」がまず重要である。
3. 普段無自覚に使っている「言語」であるが故に、「言語」をあらためて自覚し、内容とともに構造を学習することが重要である。
4. 普段無自覚に行っている「学習」を自覚的に省察する（ふり返）ることが重要である。

5. 「思考力・判断力・表現力」の育成に向けて、学習者を「思考・判断・表現」の状況に誘い、あるいは追い込み、それらの活動を活性化することが重要である。

最後に、吉田裕久(2009)の言葉を引用し考察を終えたい。

「言語活動の充実、そのこと自体が目的ではない。あくまで言語活動が、思考力・判断力・表現力等を育成することに有機的に結びついていることが肝要である。」

「国語科は、言語活動力を育成する責任教科であるとともに、他教科等の言語活動を充実させる言語活動力を支えている。」<sup>5)</sup>

(広島大学附属小学校)

### 〈参考資料〉

- (1) 「まずは『ことば』の正体を把握しておくことから」 大津由紀 雄 2012 「学校教育4月号」 学校教育研究会 p.13
- (2) 『ことばと学び』 内田伸子 1996 金子書房 pp.31-32
- (3) 「言語の発達」 荻野美佐子 1996 「教育心理学Ⅰ発達と学習指導の心理学」 大村彰道編 東京大学出版会 p.35
- (4) 「表現(描写)読みによって感動の原拠を探る物語文授業」 吉田裕久 2011 「学校教育5月号」 学校教育研究会 p.38-43
- (5) 「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動の在り方」 吉田裕久 2009 初等教育資料 p.7